



神の畑(18)



光を待つ

わたしは主に望みをおき
わたしの魂は望みをおき
御言葉を待ち望みます。
わたしの魂は主を待ち望みま
す
見張りが朝を待つにもまして
見張りが朝を待つにもまして

新年は1年1日の元旦から、学校や会社など新年度は4月1日からです。ところが教会の暦の1年は11月30日に近い日曜日から始まります。今年は11月29日からということになります。それは12月25日の降誕日(クリスマス)から遡って、4つ前の日曜日からを1年の初めとしているからです。特に、この季節を「降臨節」と呼びます。英語ではアドベントと呼びます。本来は「到来」「降りる」などの意味です。救い主キリストが神様の御座から降りて、この世に来られるのを待ち望む季節です。

教会では古来、復活日(イースター)の前の大斎節(たいさいせつ)と同様、降誕日に洗礼を受ける志願者が準備する期間として降臨節が定められました。そして洗礼を受ける予定の人だけでなく、教会の人々も一緒に日頃の生活をふり返りつつ、救い主キリストをお迎えする備えをしてきました。ですので、クリスマスの装飾はしても、聖堂の祭壇には花を飾りません。また、神さまの栄光を讃える歌は、降誕日を迎えるまでは歌いません。こうして、救い主としてこの世に来てくださったキリストを思い巡らしながら、降誕日の喜びを新たにします。

冒頭にご紹介した『詩篇』の言葉は、イエスの時代より以前、古代イスラエル人が残した詩です。この詩人は「深い淵の底から、主よ、あなたを呼びます。主よ、この声を聞き取ってください。嘆き祈るわたしの声に耳を傾けてください」(1~2節)と詠っています。自らを深淵の闇の底において神に祈っています。しかし、この詩人は冒頭の言葉にあるように神さまの救いを待ち望んでいます。暁の頃というのは最も闇の深い時とも言われます。そして「見張り」は朝を待ちつつ深い睡魔に襲われます。しかしその時こそ、彼らは目をこらして東の空を見つめます。そのように、この詩人は神さまの救いの光を切実に待ち望みつつ、信じているのです。詩人の状況は深淵にたとえられるほど厳しく暗いにちがいません。しかし暁は近い。絶望は希望に変わると信じているのです。

病人、体の不自由な人、貧しい人など神さまに対する罪人と呼ばれた人々は、この世の底で最も小さくされた人々でした。彼らは神さまの憐れみを願い叫びました。イエスはその底まで降りられました。そして手を差し伸べ、身を寄せました。あなたは罪人ではない、神さまはあなたを愛していると生涯を通して示されたのです。闇に暁の光が差し込むように、必ず夜明けは来ます。イエスは救い主キリストとしてこの世の闇の中に光として来られたので

(チャプレン 大橋 邦一)